

## 「 資料編 」

- 学習のねらい： 1. 南海トラフ地震の被害想定を知る。  
2. 増加傾向にある集中豪雨、防災気象情報について知る。

### 津波エピソード

#### ～森本福太郎翁の叫び～ 《300人の命を救った漁師》

1944年に発生した東南海地震の規模は、マグニチュード7.9で、1923年に発生した関東大地震とほぼ同じでした。震源は、和歌山県新宮市付近で、断層の破壊は北東に進み、浜名湖付近まで達したといわれています。この地震により大津波が発生し、高いところでは、2階建ての住宅をはるかに越えてしまうほどでした。

津波による被害は甚大で、特に志摩半島から和歌山にかけての海岸部で大きくなりました。

東南海地震津波到達地点碑には森本福太郎さんの名が刻まれています。森本さんは地震発生直後に、荒坂国民学校（今の熊野市立荒坂小学校）に向かいました。学校では、津波が来ることに気づいていない子どもたちが、下校のために集まっているところでした。森本さんは、玄関まで駆け付けると、「津波が来る。子どもを逃がせ！」と、辺りにとどろく大声で叫びました。このおかげで、子どもたちは高台へ避難し、多くの命が救われました。

当時、荒坂国民学校は高等科2年まであり、8学級350人の大きな学校でした。福太郎じいさんが駆け付けなかったら、すでに下校ずみの1、2年生を除いた300人の生命は、失われるところでした。

「三重県こころのノート（中学生版）」より作成

### 資料編

#### (1) 南海トラフ地震の被害想定

南海トラフ地震が発生した場合、マグニチュードは8～9、震度は伊勢志摩地域、東紀州地域を中心に、6以上の揺れが想定されています。  
また、場所によっては、約11mを超える大津波が到達することも想定されています。

【過去最大クラスの南海トラフ地震】過去約100年から150年間でこの地域を襲い、流れと津波により本県に甚大な被害をもたらしてきた、歴史的にこの地域で起こり得ることが実証されている南海トラフ地震。  
【理論上最大クラスの南海トラフ地震】あらゆる可能性を科学的見地から考慮し、発生する確率は極めて低いものの理論上は起こり得る最大クラスの南海トラフ地震。

#### ◆南海トラフ地震発生時の揺れ予測 【過去最大】



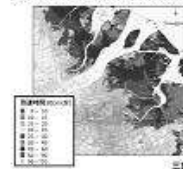
#### 【理論上最大】



#### ◆南海トラフ地震（理論上最大クラス）発生時の浸水予測と津波浸水深30cm到達予測



#### 津波浸水深30cm到達予測時間分布図



あなたの地域の震度、津波浸水などの予測は三重県のホームページで見ることができますよ！

17

#### 《参考》

##### ◆南海トラフ地震

南海トラフとは、静岡県駿河湾から九州東方沖までの海底で、約70kmにわたって続く水深4,000m級の深い溝（トラフ）の名称。マグニチュード8クラスの巨大地震が概ね100年から150年間隔で発生している。

国の発表では、南海トラフ地震の今後30年以内の発生確率を70～80%程度としており、大地震発生の緊迫度が高い状態にある。

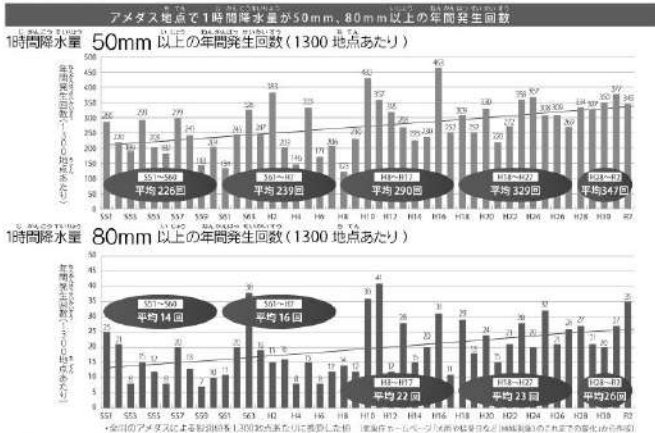
《参考》三重県地震被害想定調査結果（平成26年3月）の概要  
詳細は三重県防災対策部HP

<http://www.pref.mie.lg.jp/common/02/ci500003606.htm>

## 伊勢湾台風 ～我が国における 史上最大級の風水害～

### (2) 増加傾向にある集中豪雨

集中豪雨とは、狭い範囲に比較的短時間に大雨が降る現象です。近年の発生回数は全国的に増加しており、河川の氾濫やがけ崩れなど大きな被害をもたらすので十分注意してください。



※非常に激しい雨(50～80mm)：海のように雨が降り、マンホールから水が噴出し、地下街等に雨水が浸入し、洪水や土砂災害が発生しやすくなる。  
猛烈な雨(80mm以上)：最悪になるような圧迫感があり、大規模な災害が発生するおそれがあり、強く厳重な警戒が必要となる。

### (3) 防災気象情報

気象庁は、低気圧や台風の接近によって、大雨により災害が発生するおそれがある場合、注意報や警報等の防災気象情報を発表します。



防災みえID

**大雨注意報** 「注意してね! 災害が起こるかもしれないよ!」  
・気象情報や外の様子に注意しよう  
・避難場所への行き方を確認しよう

**大雨警報** 「危ないよ! このままだと大きな災害が起こりそうだよ!」  
**大切なこと** おうちの人と相談して避難するなど、  
早め早めに行動しよう!

**大雨特別警報** 「これまでになく危険が迫っているよ!!」  
**大切なこと** おうちの人と一緒に避難の情報を確認、  
外の様子に注意してできることをしよう!

18

昭和34年9月26日、潮岬の西に上陸し日本を縦断した伊勢湾台風は、激しい暴風雨の下、大規模な浸水を引き起こすなど、三重県内において、1,281人にも及ぶ死者・行方不明者（全国では5,098人）を出した歴史的な大災害となりました。

特に、木曾三川の下流域では、短時間の降雨量の増加と押し寄せた高潮により、堤防が決壊するなど、低平地が広がる同地域を一面、泥の海に変え、この地域だけで、800人を超える方が亡くなりました。また、被害は伊勢湾奥部だけでなく、県内のほぼ全域で、建物被害や橋梁流出、山（崖）崩れなどが発生し、その経済被害額は1,826億784万5千円に上りました。この額は、当時の昭和34年度県当初予算140億円の約13倍に相当するものでした。なお、こうした未曾有の被害の中にあっても、三重郡楠町（当時）のように、町内の大半が浸水しながら、死者・行方不明者を一人も出さなかった事例もありました。

当時、楠町では、日中に晴れ間がのぞくなど早期避難に疑問の声があがっていました。しかし、町の半分近くが水に浸かった6年前（昭和28年）の台風第13号を教訓に、まず子どもや高齢者を避難させることを決めました。午後3時には避難命令が出され、水防団員らの誘導で町民は学校や寺社などに避難しました。伊勢湾台風が上陸した夜、全半壊77棟、床上浸水462棟などの被害を受けましたが、犠牲者はありませんでした。

行政による早期の避難判断、その後の地域と住民が一体となった避難行動へとつながる一連の対応は、現在においても大いに学ぶべき対応事例であるといえます。

※「三重県新風水害対策行動計画」より引用

### 《参考》

#### ◆特別警報

気象庁はこれまで、大雨、地震、津波などにより重大な災害の起こるおそれがある時に、「警報」を発表して警戒を呼びかけていた。これに加え、平成25年8月から、この警報の発表基準をはるかに超える豪雨や大津波等が予想され、重大な災害の危険性が著しく高まっている場合、新たに「特別警報」を発表し、最大限の警戒を呼びかけることになった。

特別警報が発表されたら、直ちに命を守る行動を起こすよう指導する。